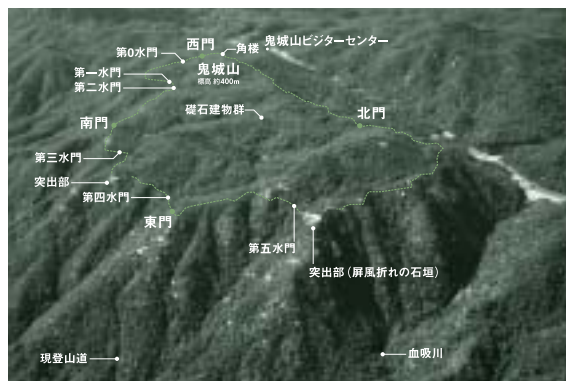




上空から見た鬼ノ城の全景

鬼に魅せ

「ほれ、今日は四国がよう見える。山は良からう」。そういつて遠くを指す横田武夫さん82歳。温羅伝説ゆかりの古代山城・鬼ノ城は、吉備高原の最南端、標高約400mの高所にある。武夫さんは強い日差しをものともせず、鬼城山を自分の庭のようにゆつくりとそして踏みしめるように歩く。さらに、城山から足をのびし岩屋まで、半日はかかるかという山道をよく巡るといふ。

武夫さんは山頂近

くの新山地区生まれで、幼い頃この辺りは遊び場だった。「ふもとの小学校に通い始めたとき、山頂付近から通うわしらの

ことを他の子が『鬼っ子じゃあ、鬼っ子が来たあ』と言うのでよう喧嘩けんかをしたもんじゃ。でも小学4年生のとき、講師の先生が『温羅は大陸から鉄や織物などの大きな文化をもってきてくれた立派な人。そして、豊かな吉備の国を作ってくれた。温羅は、鬼なんていう悪者ではない』と話してくれました



横田武夫さん
岡山県自然保護推進員

鬼ノ城西門にて

られ半世紀。

わ。それからはな、そんなすばらしい人が昔はここにおったんじやと幼心にも誇りに思いましたわなあ」と目を細める。

昭和30年頃の当時、鬼城山の一部の所有者だった武夫さんは、「鬼ノ城を景勝地として整備したい」という市からの申し出を快諾。鬼ノ城の外周路作りや桜の植樹などに尽力した。その後も、これらの管理に長年携わってきた。近年は発掘作業にも関わっている。また、

帯への巡視も欠かさ

なかった。「昔の癖か鬼ノ城を回らんといけん気がするけど、やっぱり好きなんでしょうなあ。ここを歩くと昔こへ住んどった人の息遣いを感じるんですわ」と遺構に目をやった。半世紀以上、鬼城山へ力を尽くした武夫さん。この古老には温羅の声が聞こえているのかもしれない。



鬼ノ城遠景



吉備津神社に伝わる鬼面（室町時代）写真提供 岡山県立博物館

◎特集 温羅からの贈り物

垂仁天皇の頃、吉備の国に温羅という凶暴な大男がいた。温羅は備中の国の新山に城を築き、また近くの岩屋山に櫓を構え、西国から都へ送る貢物や婦女子を略奪した。そのため人々はその城を「鬼ノ城」と言っ

て恐れた。大和朝廷は五十狹芹彦命を温羅退治に派遣した。

しかし、力は互角。激しい戦いが続く。放つ矢は全て避けられる。「されば！」命は同時に二本の矢を射た。計略は功を奏し、一本が温羅の眼を射抜いたのである。

血で川（血吸川）を赤く染めながら、温羅はキジに姿を変えて逃げ延びようとする。が、機敏な命はタカとなって追跡。そこで温羅はコイとなり血吸川に逃げ込む。絶好の機会とばかりに命は、ウとなりコイになった温羅を捕らえた。温羅はおのれの「吉備冠者」の名を命に譲り、それ以来、命は吉備津彦命と呼ばれるようになった。

この説話は一般に温羅伝承と呼ばれ、桃太郎壱の源ともいわれる伝承。鬼ノ城一帯を舞台とした温羅と吉備津彦命の壮大な戦いの物語で、これにちなむ遺跡や地名・岩などが今なお数多く残っている。温羅からの贈り物のように

鬼